九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

倉橋由美子におけるカフカ像 ： 「婚約」を中心に

劉, 苗苗
九州大学大学院比較社会文化学府 ： 博士課程

https://doi.org/10.15017/1456046

出版情報：Comparatio. 17, pp.50-61, 2013-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン：
権利関係：

倉橋由美子におけるカフカ像
――「婚約」を中心に――

劉　苗苗

一、はじめに

「婚約」は一九六〇年『新潮』の八月号に発表され、翌年の一九六一年二月に「鷲になった少年」（『週刊朝日別冊』一九六一年二月号）、「どこにもない場所」（『新潮』一九六一年一月号）とともに、新潮社から刊行された『婚約』に収録された。粗筋は以下のとおりである。ある十一月の小雨の降る午後、役所勤めのKのところに、F・Bの代理人と自称する女がやってくる。KはF・Bと会った覚えがないにも関わらず、持ちかけられた婚約の件に同意する。それだけでなく、「F・Bさんをあいしてい」ることを伝えてほしいと代理人に何度も頼む。後の出版記念会でF・Bと出会い、お互いに婚約（契約）について条件を述べ、合意に達する。しかし、Kが失業することにより、婚約手続きを実行するに当たって、前提条件となる保証金の交換が大きな壁となる。婚約手続きがうまくいかず、妊娠したF・Bからの誤解を解くため、Kは彼女のあとを追い、別荘に行く。その途中自分の作品を翻訳すると申し入れるミレナに出会う。Kが別荘を訪れ、弁解するにも関わらず、F・Bの理解を得ることができない。そのうえ、Kは喀血が進行したため、ミレナに病院に入れられる。そして入院先に訪ねてきたF・Bに子供を「処分しました。食べましたわ。」と真実を告げられる。ショックのあまり、Kはミレナに「ぼくを殺して」くれと頼み、彼女の手によって死を迎える。

倉橋は小説の最後に、「この小説のモデルは F.Kafka であり、文中かれの断片を数箇所利用した」（注一）と断り、主人公であるKとカフカの関係を明らかにしている。また「カフカと私」というエッセイにおいて、『婚約』を書いてカフカの断片を利用しながら婚約問題や父親との関係などを自己流に再構成してみたが、これは小説の形をとったカフカ論のようなものである」（注二）と「婚約」の位置づけを明言している。そのため、倉橋とカフカ、特に倉橋におけるカフカ像を考えるにあたって、「婚約」という作品がとても重要な位置を示していると考えられる。

しかし、発表当時の同時代批評（注三）を見ると、倉橋のデビュー作を高く評価し、倉橋に文壇への道を開いた平野謙であっても、『密告』にしても『婚約』にしても、へんな才能を分泌する作者の体液だけは明白である」と倉橋の才能を肯定したが、『婚約』はカフカをモデルにしたものと作者自身はことわっているが、わたしにはそのモティーフによくわからぬところがある」「どちらも成功作品ではない」（注四）と批判の姿勢を示している。

また、「おそらく作者は、自分もまたカフカと同じように小説によって、傾倒するカフカの文学のあのおそろしさに、あるいは真実に、肉薄してみたい――という情熱によってこれを書いたものにちがいない。その実験的情熱は十分に評価されてよい。ことに日本の女流作家には希有な、知的才能のひらめきと、その構想力

は珍重に値する。だが、彼女の意図や情熱を認めるのにやぶさかでない私たちも、はたして「婚約」がカフカに肉薄し得たか？という点では躊躇せざるをえない」（注五）という原子朗の評価を見ると、倉橋の「婚約」という作品への評価が依然として低いことを伺い見ることができる。

一方、倉橋のカフカ受容に関する先行研究は数多く見られる。従来の研究では、文学理念上からの影響を論じるのが大半を占めている。例えば、安藤秀国（注六）は倉橋のカフカ受容が作風の変化と連動して大きな振幅を示していると見なし、倉橋のカフカ受容を「形而上学的存在論」としてのカフカ、「病気」としてのカフカ、「スラップスティック」としてのカフカという三段階に分けてその軌跡を辿りつつ、倉橋の文学的活動とカフカ受容の特質を解明している。安藤は「婚約」が「カフカの伝記的諸関係、文学的諸要素を直接土台にしている」と述べ、登場人物のモデルや『城』『審判』との類似性を指摘している。

このように先行研究では繰り返しカフカの影響が指摘されるが、倉橋自身の「小説の形を取ったカフカ論のようなものである」という言及があるにも関わらず、「カフカ論」としての「婚約」についての具体的な考察は行われず、「婚約」の評価は発表当時から大きな変化は見られない。

「婚約」はカフカの婚約劇（注七）を下敷きにして書いた作品で、ほぼカフカの伝記的事実に沿った内容であるが、父親との関係、婚約者との関係を倉橋なりに再構成している部分もあり、そこから倉橋のカフカ理解が読み取れる一方、結婚観においては倉橋にはカフカからの影響があるのではないかと考えられる。本発表では、「婚約」における父親との関係、婚約者との関係に焦点をあて、「父への手紙」と題されたカフカの書簡と比較しながら、倉橋が創作した部分を明らかにし、またその創作意図を究明することを目的とする。

二、「婚約」と「父への手紙」との関連性

倉橋は「カフカと私」において、「この頃には新潮社版の『カフカ全集』を全巻買い揃えていた。表紙は上品なクリーム色で箱入になっていたが、この薄鼠色の箱の背には何も印刷されていないので、箱の背を見せて書架に並べると正体不明の目も鼻もない顔が五つ並んだようなぐあいになる。」（注八）と『カフカ全集』について言及している。安藤秀国は「倉橋由美子の初期作品におけるカフカ受容」（注九）において、「この頃」に焦点をあて、言及の前後のつながりなどを検討し、「この頃」を「一九六〇年頃」と明らかにしている。さらに、最初の新潮社版『カフカ全集』は、「最初の三巻が一九五五年、残りの三巻が一九五九年」という出版情報を考慮し、「五つではなく、「六つの本が目の前にあったはずであった」と倉橋の記述に錯誤があると指摘している。そうすると、倉橋は最初の新潮社版の『カフカ全集』を一九六〇年頃に買い揃えたことになる。これを踏まえると、「婚約」の執筆段階かそれ以前に、倉橋は『カフカ全集4』（新潮社　一九五九年四月）に収められた「父への手紙」というカフカが父にあてた書簡を読

んだ可能性が高い。換言すれば、「婚約」の創作に「父への手紙」がなんらかの形で影響を与えているのではないかと思われる。

「この手紙は名宛人に渡されず、したがって手紙としての機能も、まぎれもなく果たさせるつもりであったのに果たさなかったので（この点に関する詳細は拙著「カフカ傳」第一章を見られたい）、私はこの労作を「カフカ書簡集」の巻におさめないで、彼の文学作品の巻におさめた。この巻では、彼が非常に大がかりな自伝らしきものをまとめようとしたことが示されている」（注十）とあるように、マックス・ブロートは、自分が「父への手紙」を「書簡集」ではなく、「文学作品集」に収めたのは、「父への手紙」が「まぎれもなく果たさせるつもりであった」手紙としての機能を果たさなかったからと明言している。

また、その経緯について、水野纓は「《父への手紙》―カフカと三人の父―」（注十一）において、「しかし、タイプ原稿で45枚にもおよぶこの手紙は、結局宛名人には渡されなかったのである。この手紙を受取ったカフカの母親が、仲介の労をとらず、カフカの手もとに返却されたからである。結果的には《父への手紙》は、もっとも読むことを必要としたヘルマンには渡らず、宙に浮いたままとなったのである。」と述べている。水野論文によれば、カフカの母親が父親に渡さず、カフカに返却したことによって、手紙としての機能を果たせなかったことを確認できる。このことから、ブロートが「父への手紙」を文学作品として捉えながらも、カフカの手紙としての価値も認めていることがわかる。

倉橋が書いた「婚約」はカフカの婚約話を下敷きとしている。また、カフカがユーリエ・ヴォリツェクとの結婚問題で父親に罵倒されたことが「父への手紙」執筆の直接の動機であると水野は指摘している。ブロートによって「自伝」らしきものとされる「父への手紙」と比較することによって、倉橋由美子は「婚約」を執筆した当時、カフカの実生活の断片をどの程度借用したのか、また、どの程度変更を加えたのか、それらの変更によって何を意図しているのか、という疑問を明らかにしたい。

三、「婚約」と「父への手紙」との比較

水野纓は前掲論文において、「父への手紙」を含めて「判決」と「変身」の三作品の各項目別の相違を表にしている。ここでは、その項目のうちで、「婚約」との比較において、有用だと思われる項目を抜き出し、婚約の各要素と比較してみる。（表1　注記末）

家族、職業、親子関係などの大きな枠組みからみれば、カフカの実生活が書かれていると言ってもほぼ間違いない。しかし、細部を見ると、K、父親、婚約者の性格設定などには微妙に相違が生じている。

①　求婚の経緯

カフカはマックス・ブロート宅でフェリーツェ・バウアーと知り合い、ひと月ばかりして、突然フェリーツェのもとに自分のことを覚えているかと問いかける手紙を届けた。カフカとフェリーツェはその後活発な手紙のやり取りをとおして親交を深めていき、

そしてカフカはフェリーツェに求婚の手紙を出した。

それに対して、倉橋は「婚約」において、ある日突然Kのところに F・Bの代理人と称する女が訪れ、Kに婚約の話を持ち込むというカフカ的な設定から小説を始める。婚約の話における主人公の位置を逆転し、F・Bを求婚される側から求婚する側に配している。

② F・B＝カフカを取り巻く女たち

フェリーツェと五年にもわたり、婚約―解消―婚約―解消の過程を繰り返してきたカフカであるが、二度目の婚約解消の一年後、ユーリエ・ヴォリツェクという靴屋の娘と婚約を結んだ。カフカの父がユーリエの家庭がカフカ家と釣合わないとし、婚約に反対の意を示した当時、発したのが次のような語句である。

「その女はきっと何か飛切り上等なブラウスを着込んでいたんだろう。プラーグのユダヤ女のやる手だよ、そこでお前は簡単に一緒になる気になったというわけさ。おまけに出来るだけ大急ぎにだ。」（「父への手紙」注一二、三四〇頁）

一方、「婚約」でKの父は次のようなことを口にする。

いいか、おまえはF・Bの脚ばかりみていっぺんにひきつけられたのだ。なんという猥褻な動機だ。しかるにこれがおまえにF・Bとの婚約を決心させた動機にほかならないのだ。おまえはこの脚の持主と所帯をもって水いらずでやっていこうというのだ。なぜか、そうすればわしを座敷牢におしこめたままみごとにわしから逃げだし、大手を振って世間をのし歩くことができるという算段にちがいない。（「婚約」、一三九頁）

「父への手紙」によると、カフカの父はフェリーツェとの婚約に賛成の意を示すだけでなく、新居探しを手伝ったり、婚約に立ち会うためわざわざベルリンまで足を運んだりするほど協力的であったようである。それに対して、「婚約」において、「おまえはF・Bの脚ばかりみていっぺんにひきつけられたのだ」とH・KがF・Bとの婚約の意思を猥褻な動機によるものとし、婚約に猛反対する。「おまえはF・Bの脚ばかりみていっぺんにひきつけられたのだ」という語句は、カフカの手紙に書かれた父親の「その女はきっと何か飛切り上等なブラウスを着込んでいたんだろう」という発言を想起させる。

フェリーツェとの婚約に対して、支持（現実）と反対（創作）との大きなギャップから、「婚約」に登場するのがフェリーツェであるにもかかわらず、彼女にユーリエの影が投影されていることが読み取れる。換言すれば、倉橋が造形しているF・Bはフェリーツェだけでなく、その背後にカフカを取り巻く女性全体の影も潜んでいるといったほうがよいであろう。

③ 結婚への考え方

「父への手紙」には、「結婚するということ、一家を構えるということ、生まれてくる子供を全部引受けて、この不安定な世の中で養ってやり、それどころか少しは導いてやること、これはぼくの確信するところでは、概して一人の人間の成し遂げうる限りでの最大限のものです。」（三三六頁）という記述がある。

「婚約」にも「結婚して一家を構え、生まれてくる子ども全部をひきうけて世のなかに送りだしてやるということ、これは一人の人間のなしうる最大限のことだとおもう」というKの言葉がある。一見似たような表現であるが、それに続き、倉橋は「ぼくはあなたと結婚してそれを実現したいとねがっていますが、自分でもほとんど信じられないほどですよ。じっさい結婚は人生最大の恐怖なんです。でもいまいったようなことを実現すれば、ぼくにも世間へはいっていくための入場券が与えられるかもしれません」（一五五頁）と綴る。

マックス・ブロートはカフカが家庭というもの、それも家父長的な生活様式を尊重していた、またカフカが結婚というものを何よりも重視していたと述べている。水野は前掲論文において、カフカは「結婚によって父親と対等になれると考えているが」、その一方で「執筆活動が出来なくなるという不安」も抱いていると指摘している。では倉橋はカフカの結婚観をどう受け止めているのか、「婚約」にはKがF・Bと婚約を結ぶのは「そうすればわしを座敷牢におしこめたままみごとにわしから逃げだし、大手を振って世間をのし歩くことができる」からであるという父の発言がある。Kが婚約によって父を代表者とする家庭からの脱出を図っていると考えるのが妥当であるかもしれない。

倉橋は「カフカと私」において、「最大限」という表現に注目し、結婚して、子供を生み、家庭を作るというのが誰でも出来ることにも関わらず、カフカはそれを自分がなしうる「最大限」のこととしていると指摘している。倉橋はそれを「カフカは結婚を重視したように見せかけて、それを自分には到達できそうもない理想に祭り上げてしまった。こうしてカフカは結婚という実現しえない理想を実現する義務を自らに課す。これは一種の自己処罰でもある。結婚の相手として女中型の女性を見つけ、愛しようと勤める。ここでも刻苦精励によって、愛シテイルと自他ともに信じられる境地にまで近づく。そして結婚しない。その理由は明白で、もともとカフカには誰とも結婚する気がなかったのである。」と解釈し、カフカの婚約劇の背後に「結婚する気がなかった」（九一頁）という本音が隠されていると主張している。

④　母親がわが子を食べる

Kが保証金集めのために作家の仕事に没頭する間、F・BはKが婚約手続きを積極的に進めておらず、自分を裏切ったと見なし、別荘に向かう。さらにF・Bは自分の妊娠が分かった後、Kに手紙を出し、裏切り者と非難する。Kが別荘を訪ねると、F・Bは豚など家畜の飼育をKにおしつけ、自分は二階に閉じこもる。その後、二人の間に以下のような会話が交わされる。

「それにお産をしたところなのよ」

「おお、ぼくの子どもを……？」
「いいえ、猫ですわ。おそらくこれが最後のお産でしょうね。ずいぶん苦しそうですわ」
「だいじょうぶですか？」
「ええ。すっかり食べちゃったのよ。子どもも胎盤も」（「婚約」、一七二頁）

当初F・BはKに事実を明かさず、子も胎盤もすっかり食べたのは猫とした。Kはそれを少しも疑わなかった。その真実が明かされるのはKが病院に入れられた後のことである。

KとF・Bの婚約時に交わされた条件を見ると、F・Bと婚約を結ぶことによって、世間へ入っていくことを図るKの姿を見ることができる。Kが婚約を延々と延ばすことから、F・BはKに対して不信感を抱き、さらに偶発的に妊娠したことがわかった後、その不信感が募り、裏切られたという思い込みに繋がっていく。Kの行為を自分との婚約をしないまま、子が生まれてくることによって社会的自己実現を図っていると見なす。F・Bがわが子を食べるという行為は、母親の体内に取り入れ、自分自身に同化させる行為と推測される。言い換えれば、F・Bは胎児を自身と同一視しているのである。

同一視という概念は最初フロイトによって提出された概念であり、フロイトの解釈によると、次のようなものである。

われわれは、この三つの源泉から汲みあげて学んだことを、次のように要約することができよう。第一に、同一視は対象にたいする感情結合の根源的な形式であり、第二に、退行の道をたどって、同一視は、いわば対象を自我へ取り入れることによって、リビドー的対象結合の代用物になること、第三に、同一視は性的衝動の対象ではない他人との、あらたにみつけた共通点のあるたびごとに、生じうることである。（注一三）

この三つの特徴を踏まえると、F・Bが胎児を自身と同一視していることが容易に読み取れる。胎児が母体から出る瞬間に、完全なる他者となる。主体の自我が、胎児に、Kによって利用されようとしている、という自身と同じ状態に置かれているという類似点を見出し、その点において典型的な同一視が形成される。F・Bはわが子が奪われる恐怖、不安によって、もともと身体の一部である胎児を食べることによって、主体の身体に還元することになる。それは単純に「異物」を亡ぼすというよりむしろ、もともと身体の一部である胎児を体内に取り入れることによって、死と再生が循環すると解釈できるのではないか。

⑤ 父親の権威

カフカにとって強大な「敵」とは八の字髭を生やした父親のヘルマンであった。ヘルマンは成功した立派な大人で、その実証された自信の塊の前では息子はいつまでたっても貧弱な出来損ないであった。カフカは痩せてすらりとしていたがヘルマンは肩幅の

広い巨漢である。暴君のような父親、そこから生じる精神的肉体的な劣等感は生涯カフカに付きまとい、一刻も離れることがなかった。

しかし、「父への手紙」において、カフカは父親を普通の親同様に、子供に対して優しさを抱いているように造形している。

ぼくがいつか病気をしたときには、あなたはオトラの部屋に寝かされたぼくのところへこっそりやって来て、闊ぎわに立ちどまり、頸だけ伸ばして寝ているぼくを見ようとされた。遠慮なさったのか、手で挨拶されただけだった。（「父への手紙」、三一二頁）

「婚約」において、父親の権威や暴君性が以下の場面で最も赤裸々に描写されている。

「じゃあ、ぼくの骨はK家の墓地に埋葬していただけるでしょうね？」

するとH・K氏は電気椅子のうえで絶命する死刑囚のように全身を激動させた。Kにはそれが非常な憤怒をあらわすものか、それともたんなる驚愕をあらわすものか、よくはわからなかった。H・K氏はやっと呼吸をととのえると、いった。

「わしにむかって狡猾な言辞を弄するのはやめた方がよい。まったく無益なことだ。骨のことなんか知らんぞ。…中略…いいかね、おまえの死後わしに残されるのは、おまえの犯した数々の罪にたいする刑罰の執行という難儀な仕事だ。一方おまえにとって残るものといえば……恥だけだ」（「婚約」、一七八頁）

父親は家庭内の暴君で高圧的に振舞う存在であるには相違ないが、カフカの父親は親として子への優しさを持っていることが手紙の行間から窺えるが、それに対して、倉橋が描く父親像は子への愛情をいだかず、むしろ息子に対してきわめて冷淡である。ここでカフカの父親という一個人が描かれているというより、むしろ、父を代表とする家父長制という制度が一人の父親の姿を借りて動いているように思われる。

「父への手紙」はカフカが父との和解を求めるために書いた手紙であり、父の子への愛情を誇張しているということも考えられる。倉橋は父の子への愛情をすべて排除し、あえて暴君の中の暴君の父親像を描いたのは、家父長制に対して徹底した批判を行いたかったからではないか。

⑥ Kの死

「カフカの生涯と作品」（注一四）において、「一九二四年三月一七日までベルリン。―プラーグ。―四月十日、ヴィーナー・ヴァルト・サナトリウムへ出立。ヴィーンでハイェク教授の診療を受ける。―次いでヴィーン近郊キーアリング・サナトリウムへ、ドーラ及びローベルト、クロップシュトックと共に。六月三日死去。プラーグに埋葬。」という記述がある。

「婚約」には、Kの死が以下のように描写される。

Kは眼をあけた。黄いろい服を着たミレナがみえた。充分みておかなければならないとおもったが、いまにもみえなくなりそうだった。「原稿……焼却してください」とKはいった。「それから、お願いです。ぼくを殺してください。さもなければあなたは人殺しだ」

ミレナは黙って小型のナイフをとり、Kの歯のあいだからさしいれて、のどの奥を深くえぐった。「わたしにしてあげられることはこれだけなのよ。」（「婚約」、一八一頁）

カフカが病死するという事実に反して、倉橋があえてKをミレナの手によって殺させたのはなぜか。現実のカフカは婚約においても、仕事においても、父から認められず、結核も患っている。「婚約」において倉橋がKを殺すのは、生身の人間としてのカフカ像を排除する一方、文学者としてのカフカ像を捉えようとする試みであろう。倉橋は「作品ノート1」（『倉橋由美子全作品1』）において、文学と生活とを二律背反的に抱えるカフカの矛盾が文学青年の不決断から生じたものとし、その解決が死しかないとしている。そのうえ、「カフカのような卑怯な人間」が自分の手で自分を殺すのが無理と察し、ミレナという自分を殺してくれる死刑執行人を見つけるのが、作者がKに許した唯一の「恩寵」と明言している。またカフカの婚約劇を「結婚する気がなかった」無責任の行為と解釈しているところを考慮すると、Kの死は倉橋によって下された罰であるかもしれない。

⑦ 契約結婚

男女が将来における結婚の約束をすることを婚約という。そういう婚約の本来のあり方を覆すように、「婚約」の主人公KとF・Bにとって婚約は契約で、いわゆる条件交換である。Kは「結婚して一家を構え、生まれてくる子ども全部をひきうけて世のなかに送りだしてやるということ」を「一人の人間のなしうる最大限のこと」だと思い、「人生最大の恐怖」であるにも関わらず、結婚を人間世界に歩み入る唯一の道と認識し、婚約を引き受ける決意を固める。Kにとって、婚約＝社会参加の「入場券」である。

F・BはKの望みを考慮し、それを適えてやる代わりに、自分からも条件をいくつか出す。家事や、寝室を共にするなど、妻という資格に伴う機能は果たすが、婚約前の飲食習慣（毎食肉、ウイスキイの三本ストック）や生活習慣（やりたくない仕事はやらない、おなじベッドで眠らない、外出自由）などをそのまま維持する。

お互いに忠実に契約条件を守れれば、家庭を裏切ったり、捨てたりしないことを約束する。いわゆる過不足のない「公正な契約」を結ぶことになった。F・Bに保証金の話を進められ、「万一解消のやむなきにいたったときは、契約不履行によって被害をこうむった側は、相手方にわたした分をとりもどし、あわせて相手からわたされた保証金を一種の違約金として没収するということ」で合意に達する。婚約が順調に進むことを目的とする保証金だが、

このような構図からは、婚約を契約として扱っていることが明示されている。

この契約結婚に関する描写は「父への手紙」に見当たらない。倉橋の初期作品に結婚観においてボーヴォワールの契約結婚の影響が色濃く現れるところから見ると、倉橋は「カフカ論」と言われる「婚約」に自身の結婚観を投影しているといっても差し支えないであろう。

四、終わりに

「婚約」の随所に散見されるカフカの伝記的要素を拾っていくと、「婚約」が「カフカ論」であることはいうまでもない。「父への手紙」を参照しながら「婚約」におけるカフカの親子関係や婚約関係を読んでいけば、倉橋が「婚約」を書いた当時、カフカに対してけっして好意的でないことが分かる。

また、倉橋の創作した部分、特に契約結婚などから見れば、倉橋が「婚約」に自身の結婚観を投影していることが窺える。F・Bが契約結婚を主張したり、愛と結婚を分離したり、妊娠に嫌悪感を持ったりしている箇所などは、倉橋の初期の女性像と合致している。さらに、倉橋はカフカの婚約劇に一方的に自身の結婚観を投影しているのでなく、カフカの婚約劇からも影響を受けている。結婚する気がないカフカでさえ、結婚して家族を持つということを「一人の人間の成し遂げうる限りでの最大限のもの」と認識している。倉橋が初期の「結婚は女を家庭に入れることによって男のこの所有、捕獲した女の自由を社会的なタガで固定するものとなる」という認識から、「誰でもいい結婚したい」（倉橋由美子『わたしのなかのかれへ』講談社　一九七〇年三月）という認識に転換するようになったのは、カフカの婚約劇から結婚が大人の階段をのぼるにあたって誰でも通過しなければならない儀礼であると倉橋が認識したからであると推測される。

【付記】本稿は日本比較文学会二〇一三年度春季九州大会（於・福岡教育大学、七月六日）における口頭発表を基に加筆・修正したものである。

【注記】

注一　本稿における「婚約」の引用はすべて『倉橋由美子全作品1　パルタイ・雑人撲滅週間』（新潮社、一九七五年十月）所収のものによる。

注二　倉橋由美子「カフカと私」（『磁石のない旅』講談社、一九七九年三月、九八頁）

注三　平野謙のような指摘は下記の同時代評にも見られる。河上徹太郎「文芸時評（上）　倉橋由美子の無邪気な誤算」（『読売新聞』、一九六〇年七月二二日、夕刊三頁）、江藤淳「八月号の文芸作品評　悲惨な倉橋由美子」（『信濃毎日新聞』、一九六〇年七月二五日、四頁）、奥野健男「もっと強靭なまゆを　力作だが破綻が「どこにもない場所」　倉橋由美子著『婚約』」（『図書新聞』、一九六一年三月一一日、五頁）

注四　平野謙「学芸　今月の小説（上）　作家の態度と作品の評価　北牡夫と倉橋由美子について」（『毎日新聞』、一九六〇年七月二五日、一三版）

注五　原子朗「婚約」（『国文学解釈と鑑賞』三六巻九号、一九七一年八月、一一八頁）

注六　安藤秀国「倉橋由美子におけるカフカ像」（『カフカと現代日本文学』、同学社、一九八五年十月）

注七　カフカとフェリーツェ・バウアーとの婚約関係の年表一覧は次のようである（倉橋由美子「カフカと私」参照）。

一九一二年八月十三日　マックス・ブロートの家でフェリーツェ・バウアーと知り合う。

九月二十日　フェリーツェに最初の手紙を書く。やがて文通が軌道に乗る。

一九一三年六月　フェリーツェに求婚の手紙を出す。

七月　フェリーツェは結婚の意志を伝えてくる。しかしカフカが約束したフェリーツェの父への手紙を書かないので、二人の間はこじれる。

九月　リーバのサナトリウムで「小柄な、イタリヤ娘のように見えるスイス娘」のG・W嬢と親しくなる。どの程度にかは明らかでないが、のちにカフカはこの娘に「夢中になった」ことをフェリーツェに打ち明けている。

十月末　フェリーツェとの文通を再開する。

十一月　フェリーツェの年下の友達のグレーテ・ブロッホが二人の仲を取りなしたいというので、十一月にグレーテと会う。たちまち親しくなる。以後一年間グレーテと文通するが、カフカの方で露骨に誘惑の態度をとっていたらしい。この間フェリーツェは沈黙を続ける。

一九一四年一月末　カフカはフェリーツェン結婚を申し込むがフェリーツェは応じない。

四月　ベルリンで非公式の婚約

六月一日　正式の婚約が成立する。

七月十二日　ベルリンで早くも婚約を解消する。グレーテがカフカからの手紙の内容をフェリーツェに洩らしたというようなことがあったらしい。

一九一六年七月　マリエンバートで十日間フェリーツェと一緒に過ごす。

一九一七年七月　フェリーツェがプラハに来て二度目の婚約をする。そしてフェリーツェとハンガリーのオロドへ旅行するが、またもや結婚への恐怖が頭をもたげたのか、一人で帰る。

八月　　喀血する。
十二月末　フェリーツェがプラハへ来る。最終的に婚約を解消する。

注八　同注二　『磁石のない旅』七六頁
注九　安藤秀国、『愛媛大学法文学部論集（人文学科編）』二三巻二八頁
注一〇　マックス・ブロート『カフカ全集4』原註（新潮社、一九五九年四月、二九五頁）
注一一　水野纓、『東京家政学院大学紀要』二五巻（東京家政学院大学、一九八五年十月、二四三頁）
注一二　本稿における「父への手紙」の引用はすべて『カフカ全集4』（江野専次郎、近藤圭一訳　新潮社、一九五九年四月）によるものである。
注一三　フロイト『自我論』井村恒朗訳（日本教文社、一九七〇年五月、一三七頁）
注一四　『カフカ全集6』（新潮社、一九五九年四月、四五八頁）

表一「父への手紙」と「婚約」との比較

		「父への手紙」	「婚約」
父親	家族	父親、母親、妹三人、カフカ	父親（H・K）、K
	職業	自営業（カフカ商会）	自営業（H商社）
	収入	一家を養うには十分	一家を養うには厳しい
	性格	支配者気質。善良で柔和な一面もあるが、皮肉っぽい	家庭内の暴君。善良で柔和な一面がない。皮肉っぽい
	感情	激しやすい	激しやすい
	息子へのやさしさ	子供に対して普通の親がいだいているやさしさはある。だから父親失格者ではない	子供への愛情なし。父親失格。 Kが若死すると断言。 死後墓地に埋葬してほしいというKの願いを退ける。
	家庭内地位	暴君的で支配的で、中心的な存在である	家庭内で高圧的に振る舞い、暴君で支配的な存在である
	職業		
息子	健康状態	結核（ただし本文中ではこのことにふれていない）	結核、喀血が続く後ミレナに殺してくれと頼む
	性格	冷静で判断力あり	優柔不断
	父親へのやさしさ	全然ないというわけではない。普通の子がいだくやさしさは潜在している	普通の子がいだくやさしさは潜在していることがわかる。
	家庭内地位	多少家業も手伝うが、一家の中心は父親	商社の帳簿を時々見るが、父に従属的な存在
	友人	マックス・ブロート他ユダヤ人の友人（ただし本文中ではユダヤ劇団の俳優レビ以外はほとんどふれてない）	マックス・ブロート他手紙のやり取りで親交を深めるミレナ
	結婚観	結婚によって父親と対等になれると考えているが、執筆活動が出来なくなるという不安がある	結婚して一家を構え、生まれてくる子ども全部をひきうけて世のなかに送り出してやるということ、これは一人の人間のなしうる最大限のことだと思う
	婚約者	フェリーツェ・バウアーとプラハの靴屋の娘であるユーリエ・ヴォホリゼク。二人ともユダヤ人	F・B